

## C.S.ルイスの「ランスロット」

川崎佳代子

### 1

C.S.ルイスがアーサー王伝説を作品の中に取り入れたのは、『かの忌まわしき砦』(*That Hideous Strength*, 1945)においてである。この作品は、所々にチャールズ・ウィリアムズの影響がみられると指摘されるが、たしかに、ログレス対ブリテンを聖・俗の象徴とみる枠組みはウィリアムズのものである。また、実際、ウィリアムズがアーサー王伝説を彼独特の視点から構想した、*Talissin through Logres* と *Regeon of the Summer Stars* は未完の詩であるが、死後ルイスの手で編集・注解がなされた。

とはいえ、ルイスとアーサー王伝説との関わりは、決してウィリアムズの影響というわけではない。少年期より北欧神話やケルト伝承を愛好し、ウィリアム・モリスの神秘的な物語に魅せられたルイスが、アーサー王と出会うのは当然であろう。

はじめてマローリーの『アーサー王の死』を手にしたのは16才の時で、親友アーサー・グリーブズに、この物語に魅せられたこと、今迄手にしなかったことが不思議であることなど述べている<sup>1)</sup>。また、ルイスはマローリーの作品を「英国の国民的叙事詩」と呼び、マローリーをモリスがその文体を学んだまさに師であるとも言っている。

1915年1月26日付のグリーブズ宛の手紙において、マローリーの偉大さは、いきいきとした語りと登場人物の活写にあると述べている<sup>2)</sup>。同年2月2日付の手紙でも、『アーサー王の死』への傾倒ぶりが示されており、マローリーに対する愛着は、この後も長らく続くことになる。1915年5月4日付の手紙から、グリーブズをガラハッド(Galahad、『アーサー王の死』に登場する最高の騎士の名)で呼び始めたことからルイスのアーサー王伝説に対する思い入れが並々ならないとわかるであろう<sup>3)</sup>。また、この頃ケルト風物語詩を試みていたらしく、マローリーの作品は大いに刺激になったと思われる。

アーサー王に関する興味は次第にマローリー以外の資料に及ぶようになる。1916年11月8日付グリーブズ宛の手紙では、フランスのロマンス *The High History of the Holy Grail* をバーン・ジョーンズの挿絵入りの翻訳で読んでいることが記されている。ルイスはこのロマンスがマローリーのものより神秘的で背筋がゾクゾクする雰囲気を持っていると感じ、また、プロットもよくまとまっていると思っている<sup>4)</sup>。当時、ルイスは無信仰であったので、この物語の内容について、その信仰的な側面より、神秘性に魅力を感じたようである。

ウェイス(Wace)とラヤモン(Layamon)のアーサー王資料も *Arthurian Chronicles* という翻訳で読んでいる。これは、マローリーのアーサー王に比して、むしろ『ベオウルフ』に似ていると

述べている<sup>5)</sup>。ジョフリー・オブ・モンマス (Geoffrey of Monmouth) の *History of the Kings of Britain* を読んだのは1919年である<sup>6)</sup>。

1933年8月17日、グリーブズに、マローリーの『アーサー王の死』を再読し、その物語が纏まっていることを改めて発見したと書き送っている<sup>7)</sup>。クレティアン・ドゥ・トロワ (Chretien de Troyes) に関してはグリーブズ宛書簡で触れられていないが、『愛のアレゴリー』 (*Allegory of Love*, 1936) で、宮廷風恋愛の典型として、クレティアンの「荷車の騎士」が扱われていることから、1930年代の初め頃にはクレティアンのものも読んでいたと言えるだろう。

アーサー王に関する伝説や聖杯伝説には、ケルト伝承が色濃く存在しているといわれるが、アイルランドで育ち、ケルト神話風の作品を書きたいと常々思っていたルイスにとって、一連のアーサー王資料が彼を大いに刺激したことは想像にかたくない。事実、彼はグリーブズに、マーリンとニムエ (アーサー王伝説に登場する魔法使いと湖の淑女) について韻文で書いている旨報告している<sup>8)</sup>。もっともこの詩は現在残っていない。

アーサー王伝説に関するルイスの詩作で、かろうじて残っているものは、「ランスロット」 (Lancelot) である。これは、ルイスの死後、フーパーが編集した *Narrative Poems* (1969) の中に収録されている。この詩は、中世文学の講義ノートの裏に書かれたもので、そのため捨て去られずにすんだのであるが、ルイスは公表するつもりがなかったと思われる。この詩は、内容的にみて一部と二部から成るが、二部が唐突に終わっていることから、未完であると考えられる。しかし、断片であれ、この詩は内容的にも、またルイスの創作の癖という点からも興味深いものである。以下、この詩について検討してみたい。

## 2

「ランスロット」は、聖杯探究という聖なる冒険が人々に与える影響を扱おうとしている。特にランスロットとギネヴィアの宮廷風恋愛に焦点があてられている。一部は、アーサーの城から主要な騎士たちが聖杯をもとめて出発したことから始まっている。マローリーやその他の資料では、聖杯探究はペンテコステの日を開始されることになっているが、ルイスはそれを、待降節に変えている。待降節つまりクリスマスは、一つの年が死に、新しい年が始まる季節であり、人間の贖いがもたらされたことを象徴する時期であるからであろう。しかも、その良き訪れは、同時に、「人の宿命、贖い、そして挫折」 (Man's doom and his Redeeming and the wreck of man) をも意味するからである。ルイスはこの待降節を聖杯探究の奥義と重ねあわせているようである。つまり、キリストによる贖いの福音は、悔い改めをその前提にもつ。それを経なければ、この福音は逆に人に躓きや破滅をもたらすかもしれないのである。Man's doom とは人の罪を意味し、redeeming がなければ wreck of man につがるのである。このように、1~9行は、聖杯探究に出立した騎士たちの運命について暗示的な冒頭となっている。

10~26行では、主だった騎士たち不在のアーサーの城が気を失っている様子が描かれている。

こんな状態で城が攻められでもすればひとたまりもないと人々は懸念するのである。

The Sangrail has betrayed us all,  
According to the prophecy Pelles the king  
Once made that at the moving of this holy thing  
Our strength would fail.

(II. 21-24)

聖杯はわれわれ全てを裏切ったのだ。  
ペレス王がかつて予言したように、  
聖杯が動く時、  
われらの力は衰えてしまうのだ。

これは、マローリーの「ランスロット卿とガラハッド卿」の章で、漁夫王ペレスがランスロットに予言する箇所からとったものであろう。つまり、聖杯探究は、円卓の完成を表すとともにログレスの終焉の序曲とも解されるのである。

27～35行では、聖杯探究がはじまってから一年半たっても誰一人帰還する騎士がおらず、人々はそのことを期待することすら虚しく感じはじめている。最初ギネヴィアは一年経てば聖杯探究が終わるだろうと期待していたが、ここではもう口にもしなくなった。しかし逆に心の中ではますます激しい焦燥があることを感じさせる。

The year turned round and bettered, and the coloured May  
Crept up the valley of the Usk, and softening green  
Rounded the form of forests.

(II. 27-29)

年は経めぐり、よき季節が到来した。色鮮やかな五月が  
アスクの谷にしるのびより、柔らかな緑が  
森をこんもりとした。

五月という月が105行目にも使われているが、これは五月がギネヴィアにとって思い出の季節であることをしめしているのであろう。テニソンの *Idylls of the Kings* によると、ギネヴィアがランスロットに連れられてアーサーのもとにやって来たのが五月である。その思い出の五月になってもランスロットは戻ってこない。ギネヴィアの関心はただランスロットだけに注がれている。

36～67行は二年目の冬が巡ってきたことを告げている。激しく雪が降ったという描写が、暗い未来を表している。初めに帰還したのはガウェインである。ガウェインは初期のアーサー資料では聖杯騎士となっているが、それが、やがてパーシヴァルになり、後にガラハッドが中心になっている。とはいえ、ガウェインは、聖杯探究にたいして最初に名乗りを上げた騎士であり、アーサーの甥でもあり、また、ログレス崩壊にも大きな役割を果たすことになる人物である。しかしルイスは、ガウェインについて詳しく語っていない。世俗的な意味では立派な騎士のガウェインがまず聖杯探

究に失敗していること、しかも、明らかに彼は出発前とは違った人間になっていること、そして、彼と宮廷の人々との間に越えることのできない溝ができてしまったことなどが、聖杯探究が騎士たちにもたらした影響を仄めかしている。やがて、春になり、失敗した騎士たちが戻り始めた。ガウェインと同様、彼等もまた前の彼等とはちがっていた。妻たちは彼らの変容ぶりに対し当惑している。

…Now they do not understand  
Our speech. They talk to one another in a tongue  
We do not know. Strange sorrows and new jests, among  
Themselves, they have. The Sangrail has betrayed us all.  
(ll. 58-61)

今やあの人たちはわたしたちの言っていることが  
わからず、お互い、わたしたちの知らない言葉で  
話あっている。あの人たちはわたしたちの  
与かりしらぬ悲しみと、新しい冗談を  
共有している。聖杯はわたしたちをあざむいたのだわ。

聖杯探究に出かけた者は、成功者にしても、失敗者にしても、もはや宮廷には馴染まなくなってしまう。宮廷は世俗の象徴であり、聖杯は聖なる性質のものである。一旦、聖なる領域へ出向いた者は、もはや以前と同一ではありえないということであろう。

68～99行では、ガウェインや他の騎士たちが戻る中ランスロットがいつまでたっても帰ってこないことに焦りがますます強まっていくギネヴィアの様子が語られる。心配、恐れ、嫉妬、自己憐愍が彼女を締めつける。しかも、ランスロットへの愛は姦通なので、打ち明ける相手もない。ルイスのギネヴィアは、王妃としての尊厳を捨て、公にできぬ愛に苦しむ女のさがをむきだしにした女性として登場する。

… And no tidings now could do her good  
Forever ; the heart failing in her breast for fear  
— Of Launcelot dead — of Laucelot daily drawing near  
And bringing her the sentence that she knew not of,  
The doom, or the redeeming, or the change of love.  
(ll. 78-82)

もう何の便りも彼女に慰めにならなかった。  
永久に、心は彼女の内で弱っていった。  
ランスロットが死んだという恐れのため ——  
ランスロットが一日一日と近づいてくる ——  
そして彼女の与かりしらぬ宣告を  
宿命か、贖いか、それとも心変わりをもたらすのではないかと恐れていた。

ギネヴィアにとって、待降節も聖杯も関係なく、彼女の救いはランスロットによってしか与えられ

ない。彼女の心には、神へ向かう思いを入れる余地がないことを示している。

ギネヴィアがランスロットの帰還のニュースを聞いたのは、嵐の晩である。三日前に既に戻っているにも関わらず、ランスロットはギネヴィアに何も言ってよこさない。これは今までならあり得なかったことであろう。彼女はランスロットを呼び寄せる伝言を送るが、不吉な予感が彼女を襲っている。

100～118行で二人はようやく再会するが、二年の歳月以上の時間が流れたかのごとくである。ランスロットもまた変わっていた。そして、ギネヴィアも驕慢な美しい王妃、ランスロットをいつでも彼女の気紛れにつきあわせた頃とは違っていた。いや、むしろ、ランスロットのかわりようがギネヴィアに反映したというべきであろうか。二人の二年ぶりの再会は、恋人同士のものとはほど遠く、ランスロットはまるでギネヴィアの父あるいは息子のように接するのである。

He came to her and took her by the hand, as men  
Take tenderly a daughter's or a mother's hand  
To whom they bring bad news she will not understand.

(ll. 110-112)

彼は近づくとギネヴィアの手をとった、ちょうど  
人が悪い知らせをもたらそうとするとき  
理解してくれないかもしれない娘や母の手をやさしくとるように。

第一部はこのように、聖杯探究の旅から戻ったランスロットがギネヴィアに彼の旅の様子を語るところで終わっている。テニスのランスロットは、聖杯探究後、"It was not for me." と謙虚に報告するが、ルイスのランスロットはそれだけでなく、ガウェイン同様、いやそれ以上に変わっていた。彼には昔日の面影はなかったとある。

### 3

第二部はランスロットの旅の様子がランスロットの視点で語られる。

119から127行までは、うらかな春の旅路を楽しんでいる様子が語られる。鳥が頭上で祝婚歌をさえずっているという描写は、ランスロットがギネヴィアとの愛を感じながら聖杯探究にたいする楽観的な見通しをもっていることを思わせる。しかしやがて彼は荒涼とした土地にやって来る。ゴースタウンのような村に一人隠者が立つていた。この人物も土地と同様、「やせおとろえて、骨が浮き出て」いる。このうちすてられたような土地のいわれを尋ねると、この地方は漁夫王 (Fisher-king) のもので、一人の不注意な男の為に不毛のままになっていること。心正しい騎士が来て、「聖杯が誰のためのものか」尋ねるまで、呪われたままである。また、漁夫王もそれまでは、呪いのため「病に伏し、死の床で力なえている」という。これだけのことを話すと隠者は死んでしまう。ランスロットは彼を埋葬し、彼の魂のために祈ると、「自らは、キング・フィッシャーマンのもとへ行き、聖杯を見出すように、恵みを求めて祈った」のである。128から170行の時点では

ランスロットは自分が隠者のいった「不注意な男」（これは、パーシヴァルを指すのであろうか）のような失敗を犯さずに聖杯を見出せるかもしれないと考えている。

171から190行の時点では「荒野での一休止」が謳われている。「きらきら光る水」、「日の光」、「丘にすっぽり囲まれた、暖かい緑の国」、鳥の「天使の歌声」に囲まれて、ランスロットは「愛が液体のように心にわきあがった」のを感じるのである。そして、思いをキャメロット、そしてギネヴィアへと馳せるのである。やがてランスロットが川にそって歩むと、大理石の柱をもつ社にたどり着いた。これは、その前の、不毛の土地の一軒の石づくりの庵と好対照をなしている。この社の主は、隠者と正反対の乙女であった。彼女は、この社が三人の最高の騎士を葬る墓であると告げる。ランスロットは半ば恥ずかしそうに、目を伏せたまま、最高の騎士とは誰なのか、乙女に問うのである。この時ランスロットは自分がその三人の騎士の一人ではないかと予想していたのであろう。なぜなら、彼は、アーサーの円卓の騎士の中で、最高の騎士と常々言われてきたからであり、また、それだけのことはしてきたという自負もあったことであろう。

しかし、期待に反して、「一つの墓はボールス、一つの墓はパーシヴァルに、一つの墓はガラハッドのもの。しかし、湖の臆病な騎士、ランスロットにはない」という残酷な宣告が空から聞こえてくるのであった。これは、聖杯騎士として成功する三人の予言である。

Then came clear laughter jingling in the air like bells  
On horses' manes, thin merriment of that which dwells  
In light and height, unaging and beyond the sense  
of guilt and grieving, merciless with innocence.

(ll. 217~220)

それから、澄んだ笑い声が、馬のたてがみの上で鳴る鈴のように  
リンリンと響いた。光と高き所に住まうもののもつ  
かそけき陽気さは、年をとることもなく、罪の意識や  
悲しみの向こうで、罪のなさゆえに、無慈悲であった。

この乙女は、「輝くような、うす青い、空気のような衣装を身にまとい、その顔は光で満ち輝いており、微かに開いた口元は、たった今まで歌を歌っていたかのようである」と語られていることから、天使のような存在であることがわかる。彼女の役割は、ランスロット（楽観的に自分の力を誇っていた）に、本当の姿を認識させることであった。「臆病」という形容詞くらいランスロットと掛け離れた言葉はないが、ここでは、信仰という側面から見た、逆説的な意味をもつのである。しかし、この時のランスロットには、自己認識よりも侮辱の思いが強かったと思われる。従って彼には、もっと強烈な体験が必要とされるのである。次の221行からランスロットが遭遇する冒険が語られていく。

川に沿って旅を続けると、川は「幅が広くなり、だんだんと流れが緩やかになっていった。谷の小道は泥で柔らかくなり、広い沼と網の目のように入り組んだ、暖かい緑の水溜まりの間を蛇のよ

うにくねくね縫っていった」。(The river flowed/Wider and always slower and the valley road/Was soft with mud, and winding, like a worm, between/Wide swamps and warm entanglement of puddles green : ll. 225~228) "wide" の反復や, "mud", "soft" "swamp", "entanglement"などの語がランスロットが遭遇する冒険あるいは陥ろうとする状態を暗示している。また、この箇所描写は、ルイスの『天路逆行』(The Pilgrim's Regress, 1933)で表した「南」のイメージを連想させる。この本の「あとがき」の中で、ルイスは「南」という地理的イメージについて次のように述べている。

禁制の、未知なるものの刺激は命とりともなる魅力でもって、彼らを虜にする。未知との境界をばかし、抵抗を緩め、夢、阿片、暗闇死、そして母胎への回帰を経験させてくれるものがそれである。すべての感情は、それが感じられるという事実で正当化されてしまうのである<sup>9)</sup>。

この「南」を代表する地理的イメージは「沼沢地」である。さらに、幅の広い川は、聖書の「広き門」を連想させ、これが滅びに至る道であることを暗示している。この道を辿ってランスロットが「死すべき城」(Castle Mortal)に到着するのは当然の帰結といえようか。「死すべき城」は、『ベルレスヴォー』によると、「聖杯城」であるカーボネックの城主ペレスの弟の城である。そして、ペレスが死ぬと、「聖杯城」は「死すべき城」の王に攻略されるという。『「死すべき城」は、悪を包んだ身体ないし肉体を示唆し、その支配者は明らかに罪と死の王である』<sup>10)</sup>。ルイスは、王ではなく王妃を登場させている。しかし、彼女が罪と死の王妃であることにかわりない。

ここで興味深いのは、ルイスが「死すべき城」を「聖杯城」のパロディとして描いていることである。聖なるものを真似つつ、少しずつ歪曲している点など、『あの忌まわしき砦』のセント・アンズとNICEを思いおこさせる。たとえば、「死すべき城」の王妃はラバ(mule)に乗ってやって来る。ラバは乗り物として特に珍しい動物ではないが、聖書には悟りのない動物の一つとしてあげられている(詩篇32・9)。ここでは乗り手よりむしろ、ランスロットにおける自己認識の欠如—無知を表していると考えられる。また、ラバが何も生み出さない動物という点で、ランスロットとギネヴィアの実らぬ愛をも指しているであろう。彼はこの女性を見た時モルガン(アーサー王の異父姉)とギネヴィアに似ていると思った。また、彼女の服が、先述の天上の乙女とは違って、龍の背のように金色に光っている(gleam)ことにも気がついている。この時点で、用心深い、貞潔な騎士(聖杯騎士はそうでなくてはならない)なら、彼女の誘いを拒んだかもしれない。しかし、ランスロットは喜んで同道するのである。城の中で、彼は柔らかない、ゆったりとした服(a long-sleeved mantle, soft and wide)に着替える。ここでも"wide"の使用に注目すべきであろう。また、袖の長い服というのは、動きを鈍くするものであるから、ランスロットが完全に相手を信用し、抵抗する気をなくしていることがわかる。やがて、二人は食事をするが、百本のろうそくが輝く部屋の中で、強い赤ワインを飲む。この場面は、聖杯城での食事と最後の晩餐を連想させるものである。しかし、この酒は祝福のためのものではなく、ランスロットを酩酊に誘うものである。この婦人が

モルガンのような妖姫 (enchantess) であることがわかる。次に王妃はランスロットに、この屋敷にある驚嘆すべき物 (marvels) を見てくれと招くのである。以下、ランスロットの遭遇する出来事が、聖杯探究のパロディであると言ってもよいであろう。

聖杯探究というのは三つの条件から成っている。先ず、聖杯城そのものを見つけること。これは、霊的な城なので、以前偶然行ったからといってまた行き着けるとはかぎらない。そして、近くにいなながら、見えないときはどうしても見えないのである。次に、聖杯城へ無事たどりついたとして、その中で奇蹟 (marvels) を目撃することである。聖杯は通常女性が持って現れる。聖杯の動く部屋は目も眩むような光と、えもいえぬ香りに満たされている。そして、足を怪我した漁夫王 (あるいは不具王ともいう) に、聖杯が誰に仕えているのかという質問を発することである。パーシヴァルは、この二番目の条件まで満たしながら、正しい質問をしなかったために、第一回目は失敗したのである。

このことを念頭において、259行から読んでみよう。王妃がランスロットをみちびいたのは、礼拝堂 (chapel) にである。扉が開くと、天国の生命の木から漂ってくるような香りがする。しかし、これは、あくまで死を前にしている者 (dying man) が想像するような香りとして説明されている。「死すべき城」の香りとしてふさわしいといえるであろう。この部屋には何百本ものろうそくがあかかかと輝いている。目映い聖杯城の光が超自然のものであるのにひきかえ、ろうそくは、地上的・人工的である。そして、夜一闇一死—死者のための灯明という連想を誘う。

ランスロットはもしや、ここで聖杯を見ることができないのではないかと思ったかもしれない。しかし、彼女が見せた驚嘆すべき物は、聖杯とは天国と地獄の差があった。それは、三つの石柩であった。ランスロットはおそらく百合の花咲く社の三つの墓のことを思い出しただろう。先ほどの香りは、柩の中に詰められた香り草の匂いであった。彼は死のように甘美な匂いにおもわず目が眩むようであった (the odour that by now makes dim/His sense with deathly sweetness, ll. 268～269)。王妃はこの柩が三人の最高の騎士のものだと告げるが、ランスロットは無言である。彼は前回無邪気に尋ねて手ひどいしっぺがえしをうけたので懲りていたからである。「ランスロットは頭を垂れていた」という所は、彼が少しずつ自分の状態について認識しはじめていることを暗示している。王妃は、声高らかに笑って、その柩がラモレクとトリストラムとランスロットのものであると言う。ランスロットは思わず十字を切ってから、いつ三人が死ぬのか尋ねる。柩が誰のものか、また、いつ三人の騎士が死ぬのかという質問は、聖杯城ですべき問いのパロディである。王妃は、三人とも柩の入るときまだ生きていたのだと答える。そう言って、壁にとりつけられたピンを回すと、柩に安置されたとき首のあたりにあたる所に鋭い刃が落ちてきた。ランスロットは、このギロチンを見て愕然とする。王妃は次のように説明するのである。

… But for endless love of them I mean to make  
Their sweetness mine beyond recovery and to take  
That joy away from Morgan and from Guinever



And Nimue and Isoud and Elaine, and here  
Keep those bright heads and comb their hair and make them lie  
Between my breasts and worship them until I die.'

(ll. 291~296)

…「永遠の愛のために 私はあの人たち美しさを  
永久に私のものとし、モルガンやギネヴィアから  
そしてニムエやイゾルドやエレヌから、  
あの喜びを取り去るつもりなのです。そして  
ここに、三人の輝く首をおいて、髪を櫛けずり、私の  
胸に抱いて、死ぬまで拝するのです。

この女性は、マローリーの「湖のランスロット」の章でランスロットに横恋慕する妖姫ヘスラウス (Hallewes) をモデルにしていると考えられる<sup>11)</sup>。ルイスは彼女を単なる誘惑者とし用いているだけでなく、ランスロットとギネヴィアとの愛がいかようなものであるかを知らしめる役割を担わしめている。彼女が拝する三人の騎士は、その愛の対象がいずれも人妻である<sup>12)</sup>。姦通の罪を犯している騎士は、その他の面でいくら優れていても、行き着く所は「死すべき城」であることを示している。そして、ここでは永遠の愛が、天上を志向するものではなく、母胎への回帰に変えられている。アーサー・ロマンスでは、モルガンを筆頭に、女性はしばしば男性が理想的な騎士道を歩もうとするのを阻む存在として登場するが、ルイスの作品においても、女性はすべてをのみこんで死にいたらしめる、否定的な面を持つ存在として描かれることが多い。『銀の椅子』の緑の魔女はその典型である。この詩における、柩や女性の胸は、男性を永久に自分のものとして閉じ込めてしまおうとする、エゴイスティックな愛の象徴である。

ランスロットは、王妃の答えに慄然としたことであろう。しかも、彼女はギネヴィアに似通っていることを思いあわせれば、彼女の愛も結果的には「死すべき城」の王妃の愛と同じではないか。ギネヴィアへの愛は、宮廷風恋愛のルールに則って、彼を台無しにするよりはむしろランスロットの士気を鼓舞し、一層勇敢な騎士としての業績に役だっていた。しかし、それはあくまで地上的なことだけであったのである。霊的な飾りかけられたとき、純粹だと思っていた愛も、姦通という範疇に入れられる。そしてその愛は、彼を最後には食いつくし、のみこんでしまうものなのである。

「ランスロット」は、「死すべき城」の王妃の言葉で終わっている。この後ルイスはどのような物語の展開を考えていたのか、類推する資料はない。確実に言えることは、ランスロットが無事帰還していることから、彼がこの妖姫の手から逃げおおせたことである。また、この体験だけで、ランスロットの第一部での変わり様を説明するには十分ではない。おそらくは、この城を出て、さまざまの事件に出会い、最終的には、聖杯を目のあたりにしながらも成功できないランスロットが描かれるのであろう。そして、その理由が自分の隠れた罪 (姦通) であることを切実に知るにいたるのだろう。マローリーのものでは、ランスロットはほとんど変容していない。聖杯探究が終わったあとの宮廷の描写を比べてみると、ルイスの意図が一目瞭然である。

… 聖杯の探究がめでたく終わったので、生き残った騎士は全部また円卓に戻った… 宮廷は大きな喜びに包まれた。殊にアーサー王とギネヴィア王妃は凱旋した生存者を歓迎した。聖杯探究のため長い間留守にしていたランスロット卿とボールス卿を迎えて、王も王妃も大変なよろこびようだった<sup>13)</sup>。(マローリー)

… Then, with the spring, began  
The home-coming of heroes from the Quest, by two's  
And three's, unlike their expectations, without news,  
A dim disquiet of defeated men, and all  
Like Gawain, changed irrelevant in Arthur's hall,  
Strange to their wives, unwelcomed to the stripling boys.  
(ll. 50~55)

… それから、春とともに  
探究の旅から戻る騎士たちが相次いだ。二人また  
三人と。人々の期待に反して、何の知らせもなく  
挫折した男たちのかすかな同様を伴っていた。すべての（聖杯騎士たち）が  
ガウェインのように、変わってしまって、アーサーの宮廷にはそぐわなくなっていた。  
妻たちには、他人行儀で、若者には鬱陶しいものだった。  
(ルイス)

『アーサー王の死』において、聖杯探究の物語がいささか挿入的な印象を与えるのは、聖杯探究の冒険が騎士たちの生き方そのものに大きな影響を与えたように語られていないせいかもしれない。マローリーは、この後ランスロットがギネヴィアと以前どおりの関係をもつように描いている。しかし、ルイスは、聖杯探究というような、従来の騎士の冒険と根本的に違う体験をした人々が変わらないわけではないと考えるのである。この点で、『ウルガタ・アーサー物語集成』(*The Vulgate Cycle, c. 1215~1230*)の中の『聖杯探究物語』(*The Quest of the Holy Grail*)に近い見方をしている。『聖杯探究物語』では、ランスロットがその罪を何度も告発され、その都度修道僧に説教されたすえ、ギネヴィアへの愛がいかに聖杯探究から自分を遠ざけているか認識する。そして心から悔い改め、以後は修道僧のような生活を送る決心をする。この物語ではランスロットがその後ギネヴィアと同じ関係をもつとは考えられない。

とはいえ、ルイスはシトー派の教義が濃厚な『聖杯探究物語』のような話の進め方はしていない。聖杯探究は、それがケルト伝承の物であろうと、キリスト教化されたものでであろうと、本来、異界あるいは超自然的世界への旅を意味している。この、異界あるいは超自然的なものにまわりつく「ヌミナス」な感覚をルイスは導入しようとしたのではないだろうか。「聖なるもの」とヌーメンは切り離せないルイスは考える。それを体験したものは、程度の差こそあれ、変容を遂げるのである。ここで、ルイスが『愛はあまりに若く』(*Till We Have Faces, 1956*)において、アプレイウスの「クピードとプシュケ」の物語をどのように変えたかを思い出すとよい。ルイスの再話におい

ては、プシュケの住む神の家は不可視である。神の啓示のよってのみ見えるようになる。そして、それを見せられたオリュアルは、それ以後ヴェールをつけるようになる。これはヌーメンを体験したオリュアルの変容をあらわしているのである。

ルイスの「ランスロット」では、変わらなかったのは、モードレッドやアグラヴェーンなど探究し出なかった騎士たちで、彼らが逆にもてはやされたとある。そして、この人物たちが、円卓の崩壊の直接原因を作ることになるのである。聖域への旅を経験しなかった者が、野心・嫉妬・陰謀をもってログレスを掻き乱すのである。第一部におけるランスロットのギネヴィアへの態度は、彼が二人の愛の終焉を告げることを仄めかしている。愛を清算したランスロットとギネヴィアが、奸計によって告発されたとしたら、アイロニーは一層強まり、悲劇性は増すのではないだろうか。

#### 4

ルイスがいつ頃「ランスロット」を書いたのか明らかではない。筆跡から判断すると、1930年代の初め頃であろうとフーパーは述べている<sup>14)</sup>。1940年の8月に“*The Necessity of Chivalry*” (*Time and Tide*, Vol. XXI) というエッセイを書いて、この中でランスロットを騎士の代表として扱っていることから、1930年代はルイスがアーサー王伝説にこだわっていた時代であろう。また、ルイスは「クピードとプシュケ」を先述したような視点で、最初は詩の形式で書こうとしたが失敗している。30年後に『愛はあまりに若く』という散文の物語のうちに完成をみた。同様のことが「ランスロット」と『かの忌まわしき砦』にも言えるのではないだろうか。つまり、アーサー王伝説のマーリンやニムエ、ランスロットを題材にした物語詩は断片に終わっているが、一応散文の物語の形で日の目を見たといえるだろう。この作品が1945年の出版であるので、「ランスロット」はそれ以後とは考えにくい。『天路逆行』の「南」のイメージとの関係や、『愛のアレゴリー』、また1933年に『アーサー王の死』を再読している点などから、1933年あたりが可能性として考えられるのではないだろうか。従って、フーパーの1930年代説は妥当といえよう。

アプレイウスの再話の件や、「ランスロット」を考えると、ルイスはやはり、詩人としてよりも散文の物語作家としての天分のほうがすぐれていたのだという結論になる。しかし、完成していれば、「ランスロット」は、内容的にも構成の面からもおそらく優れた作品になったと思われる。せめてもう少し長ければ、アーサー王伝説の一つの資料として、重要なものになっただろう。断片でおわったのが惜まれる。ウィリアムズのアーサー王伝説の未完の詩を編集しているとき、ついに完成を見なかった自分のアーサー物語のことがルイスの脳裏をよぎらなかつたであろうか。

#### 〔注〕

1) 1914年11月17日付けグリーブズあての手紙. *They Get Together*, ed. by Walter Hooper (Macmillan Publishing Co., Inc., 1979), p. 61.

2) *ibid.*, p. 63.

3) *ibid.*, p. 68.

- 4) *ibid.*, p. 148.
- 5) *ibid.*, p. 248 (1919年3月2日付)
- 6) *ibid.*, p. 249.
- 7) *ibid.*, p. 458.
- 8) *ibid.*, pp. 252, 261, 273 (1919年6月2日, 1919年9月8日, 1920年4月11日付の手紙に言及)。
- 9) C. S. Lewis, *The Pilgrim's Regress*, (William B. Eerdmans Publishing Co., 1981), p. 206.
- 10) リチャード・キャヴェンディッシュ, 『アーサー王伝説』, 高市順一郎訳 (晶文社, 1991), p. 236.
- 11) Thomas Malory, ed. by Eugene Vinaver (Oxford University Press, 1954), pp. 204-6
- 12) トリストラムはコーンウォール城のマーク王の妻イゾルドを愛し, ラモレクは, アーサーの母イグレーヌが前夫との間にもうけたモルゴース (オークニーのロス王の妻) を愛した。ラモレクはこのためガウェイン兄弟に殺された。
- 13) Malory, *ibid.*, p. 744.
- 14) C. S. Lewis, *Narrative Poems*, ed. by W. Hooper (Harcourt Brace Jovanovich, 1979), p. xii.

#### [参考文献]

- Malory, Thomas, Sir., *The Works of Thomas Malory*, ed. by Eugene Vinaver (Oxford University Press, 1954).
- De Troyes, Chretien., *Arthurian Romances.*, trans. by W. W. Comfort (J. M. Dent & Sons Ltd., 1958).
- The Quest of the Holy Grail*, trans. by P. M. Matarasso (Penguin Books, 1977).
- Lewis, C. S., *They Stand Together: The Letters of C. S. Lewis to Arthur Greeves (1914-1963)*, ed. by W. Hooper (Macmillan Publishing Co., Inc., 1979).
- Lewis, C. S., *Narrative Poems*, ed. by W. Hooper (Harcourt Brace Jovanovich, 1986).
- Lewis, C. S., *The Pilgrim's Regress* (William B. Eerdmans Publishing Co., 1981).
- Charles Williams and C. S. Lewis, *Arthurian Torso* (William B. Eerdmans Publishing Co., 1980).
- 四宮 満 『アーサー王の死』 (法政大学出版局, 1991).
- Barber, Richard, 『アーサー王』 高宮利行訳 (東京書籍, 1983).
- Cavendish, Richard, 『アーサー王伝説』 高市順一郎訳 (晶文社, 1991).
- Moorman, Charles, *The Arthurian Triptych* (University of California Press, 1960).
- Tennyson, Alfred, *Idylls of the Kings*, ed. W. P. Lewis (Merrill, 1912).